

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 4 月 2 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520265

研究課題名(和文) 初期近代イギリス劇における視覚的表現手法の演劇空間論的観点からの研究

研究課題名(英文) A Study of Visual Effects in the Early Modern English Theatrical Space

研究代表者

市川 真理子 (ICHIKAWA, Mariko)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：80142785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：シェイクスピア劇をはじめとする初期近代イギリス劇が上演されたロンドンの劇場では、現代のような大掛かりな舞台装置は使われなかった。しかし、ト書きやせりふに内在する情報を細かく分析すると、舞台構造や小道具等を巧みに利用した初期近代イギリス劇特有の空間的メタファーとも呼べるような視覚的表現を駆使していたことがわかる。テキストの分析を通して、こうした手法を解明することを目指し、とりわけ、左右のドアの使用方法が、時として、観客の観劇経験を左右するような極めて深いインパクトを与える手段となり得ることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The London commercial theatres of the early modern period employed little scenery or set. However, this does not mean that the Shakespearean theatre was a place of primitive techniques, capable only of crude and unsophisticated theatrical effects. A close analysis of play texts shows that the structure of the theatrical space in which the plays were first performed made possible various kinds of visual effects. The Merchant of Venice, for example, offers a scene where Shylock's status as villain is reinforced not just by the play's imagery but by the way that the actual structure of the Elizabethan stage made visible some of that imagery, giving it greater intensity. In Act 2, scene 5, his locking up inside his house all his possessions, including his own daughter, symbolizes his mean, suspicious, and narrow-minded nature. This study deals with such visual "metaphors" presented in the stage space of the early modern English theatres.

研究分野：イギリス演劇

キーワード：theatre stage staging play-text stage-direction

### 1. 研究開始当初の背景

国内国外ともに、初期近代イギリス劇の研究者の大方は文学批評や文化研究等に携わり、様々な成果を挙げている。そうした研究を直接的ないしは間接的に支える基礎学問の中に、シェイクスピア時代の劇場研究や上演研究がある。

本研究の研究代表者(市川真理子)も長年、劇テキストを当時の劇場構造や上演との関係において扱うことに従事し続けてきた。とりわけ、最も基本的なト書きである‘Enter’, ‘Exit’/‘Exeunt’, ‘Within’, ‘Above’等を総合的に分析することにより、その意味や用法が現代の編者や読者が認識しているものとはかなり違っていただことを明らかにした。その研究の基礎は一つ一つの事例についてテキストを綿密に分析し考察することであったが、そうした調査の中でト書きの意味のレベルに留まらない発見が多数あった。

例えば、『ハムレット』第4幕第5場でレアティーズがクロードディアスの許に乗り込むとき、シェイクスピアの原稿を印刷所原本とすると考えられる第二・四つ折り本(Q2 [1604])のト書きは‘Enter Laertes with others’となっているが、対話の分析から、レアティーズに従っている者たち(others)は実際には舞台に入らず、舞台のドア(a stage door)の背後から姿を覗かせただけであることがわかる。多分、たった2,3人の俳優がドアから姿を見せるだけで、「群衆」を表象したのである。部分を以って全体を表す提喻法(synecdoche)的な演劇手法である。

また、ベン・ジョンソンの『エピソード』のト書きとせりふの分析からは、モロースの登場するシーンはすべて室内に設定され、劇の前半では舞台のドアが両方とも閉められていて、それが彼の閉じ籠っている世界の象徴となり、後半は、彼とエピソードとの結婚により、彼の世界が破壊されたことがドアが開けられたままになることによって視覚的に示された、ということが明らかである。

このような例にしばしば当たりながら、この時代特有の舞台構造や上演の諸条件(劇団の俳優の数など)と密接に関係する演劇手法を研究する意義と必要性を強く認識した。

### 2. 研究の目的

シェイクスピア劇をはじめとする初期近代イギリス劇が上演されたロンドンの劇場では、現代のような大掛かりな舞台装置は使われなかった。しかし、ト書きやせりふに内在する情報を細かく分析すると、舞台構造や小道具等を巧みに利用した初期近代イギリス劇特有の空間的メタファーとも呼べるような視覚的表現を駆使していたことがわかる。

本研究は、現存する劇テキストを演劇空間論的観点から調査することにより、当時の劇作家たちや劇団が持っていた視覚的表現手法のレパートリーを解明することを目的と

する。

演劇とは本来、比喩的要素の強いものであることに加え、初期近代イギリス演劇はすぐれて象徴性が高いものである。また反復や対照による効果が計算されていることが窺われる例が非常に多い。このような認識から、主要な視覚的表現は、少なくとも次のような舞台構造や上演の諸条件に関連するものに分類できるであろうと見込まれた。

(1) 舞台空間における相対的位置に関するもの(左右対称、中央、上下など)

(2) 特定のロケーションの使用の反復や対照

(3) 舞台のドア(stage doors)の開閉等に関するもの

(4) 特定の小道具の使用に関するもの

このようないくつかの型の手法が、劇場における観客への情報伝達という観点において、各シーンの出来事や劇全体のテーマ等をより効率よく、より印象深いものとするのに貢献したことを論証し、初期近代イギリス演劇の修辞学論を展開することが最終的目的であった。

### 3. 研究の方法

本研究は、大別して、次の三つの営為から構成された。

(1) 劇テキストの調査・分析によるデータ収集

(2) 関連する諸研究の調査および研究

(3) 論考の作成および理論の構築

すなわち、初期版本やマニュスクリプトの形で現存する劇テキストを調査し、データを集め、それを分析処理し、関連分野の研究成果を念頭に置きながら、議論をする、という作業であった。

各営為について説明すると、まず、データの収集に当たっては、国内にいる期間は、Tudor Facsimile Texts, Early English Books Online (EEBO)等、ファクシミリ・テキストを有効に利用したり、Literature Online等の電子テキストを使うことで、データ収集の効率化を図ることも行った。しかし、ファクシミリの印刷状態は決して満足のいくものではないし、また、同じエディションでもいくつかの印刷状態(state)がある場合がある。さらに、当時の上演を反映する書き込みのある印刷本は非常に有益である。そうした認識に基づき、可能な限り、直接オリジナル・テキストを、しかも可能な場合は複数のテキストを調査することを旨とした。ブリティッシュ・ライブラリー、フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー等で初期版本やマニュスクリプトを調査し、とりわけ、当時の劇団のbook-keeperによる書き込みのある上演台本からは極めて有益な情報を得た。

また、データを分析し議論を深めていくために、シェイクスピア時代の劇場、舞台、演技や、劇団などに関する諸研究は当然ながら、演劇全般を対象とする空間論だとか、記号論

や表象論なども視野に入れた調査および研究を行った。

ルネサンス期の手法のうち、あるものは中世演劇やローマ古典劇などの手法が発展したものであることが予測されたので、こうした劇も調査するとともに、イギリス演劇全般にわたる研究書も広く、新旧を問わず、対象とした。

さらに、オリジナル・ステイジングや関連諸分野の研究者たちのリビューを求めため、研究の一端をなす問題に関して論文を書き、国際誌に投稿したり、国際学会で口頭発表を行ったりした。このようにして論考を深めていった。

#### 4. 研究成果

シェイクスピア劇などが上演された初期近代のロンドンの劇場では、各シーンの場所の設定を示す書割 (scenery) は使われなかった。そのため、舞台背後の楽屋の正面壁は、ほとんど常に観客の目に触れていたわけである。とりわけ3つの開口部 (左右のドアと中央開口部) の使用法は、時にきわめて深いインパクトを観客に与え、その観劇経験に大きな影響を与えたことが明らかとなった。以下、左右のドアの使用法と中央開口部に関する研究成果について述べる。

まず、左右のドアの使用法に関しては、第一に、『ヴェニスの商人』の登場人物であるシャイロックの性格表現の一端として、舞台のドアがいかに使用されていたかということ論じた ‘Shylock and the Use of Stage Doors’ が挙げられる。

シャイロックの名の由来に関しては諸説あるが、‘suspicious’, ‘distrustful’, ‘cautiously reserved’ の意味を持っていた ‘shy’ と ‘lock’ の二語から構成されていることは注目し得る。

当時の劇場では上演中、舞台のドア (stage doors) は基本的に開いていたのか閉じていたのか、という問題がある。かつて研究代表者 (市川) 自身が行ったドアの使用法に関する研究結果によれば、劇世界における特定の建物や部屋などのドアとして使われるとき以外、舞台のドアは開いたままになっていたと考えられる。

『ヴェニスの商人』には、舞台のドアが虚構世界の中のドアとして使われるシーンは極めて少なく、確実にドアの開閉が必要なシーンは第二幕第五場だけである。このシーンでは、シャイロックがバッサニオの招きに応じて食事に出かける間際の出来事が提示される。シーン冒頭、シャイロックとランズロットは、ドアを開けて登場するだろう。このことにより、それまで単なるニュートラルな舞台のドアであったものが、その瞬間、シャイロックの家の入り口となるのである。彼の関心事は専ら留守中の財産の安全である。娘のジェシカを呼び、鍵を渡し、繰り返し戸締りを命じ、ようやく出かける。ジェシカは

‘shut doors after you’ と命じられたとおり、退場してドアを閉めるだろう。これはシャイロックという閉鎖的で偏狭な反喜劇的人物が劇の構造上果す機能を舞台構造を使って視覚的に比喩表現したものである。

ポーシャの家のドアが、終始、物理的にも比喩的にも開いていることと対照を成すことは明白である。つまり、舞台のドアの使用法は、『ヴェニスの商人』という喜劇の構造と関わっているのである。

さらに、もう一つ、左右のドアの使用法に関する成果として、‘Enter to/at the door’ が挙げられる。

‘Enter to/at the door’ というロキューションは、俳優が舞台背後のドアから姿をのぞかせるという不完全な登場を指示するものであるが、具体的には、‘Enter Judas and his people to the door’ (John Fletcher, *Bonduca* F1, 4H3v); ‘Enter La-writ, and a Gentleman at the dore’ (John Fletcher, *The Little French Lawyer* F1, I3r) などが挙げられる。

上述したように、『ハムレット』第4幕第5場において、レアティーズがクローディアスの許に乗り込むとき、Q2 (1604) のト書きは ‘Enter Laertes with others’ となっているが、対話の分析から、レアティーズに従っている者たち (others) は実際には舞台に入らず、舞台のドアの背後から姿を覗かせただけであることがわかる。このように、わずか2, 3人の俳優がドアから姿を見せるだけで、「群衆」を表象するという手法があったと考えられる。

アメリカ合衆国ヴァージニア州に再建された Blackfriars Theatre で開催された第7回ブラック・フライアーズ学会において、この手法について発表する機会を与えられた。その際、シェイクスピアやフレッチャーの劇などから収集したいくつかのシーンを舞台上で、俳優たちに演じてもらい、観客席にいる学会参加者たちに対して、こうした手法が実際に当時の観客たちに無理なく受け入れられたと思うか否かと問いかけた。その結果、参加者たちほとんど全員が、実際に俳優の演技を見て、この手法は確かに受け入れられただろうという意見を表明してくれた。このように、実験を通して、‘Enter to/at the door’ の効果を確認することができたことは幸いであった。

次に、中央開口部に関するものであるが、研究期間最終年になるころ、中央開口部を被うカーテンの使用についても考察を始めた。舞台背後の左右のドアや中央開口部の使用法に関する考察において、俳優の登場や退場のしかたがシーンの場所や時間の設定の伝達に貢献していたことを論じながら、中央開口部を覆うカーテンが、いわゆる「発見」や「立ち聞き」ないしは「覗き見」のシーン (discovery scenes; observation scenes) などのアクションのために必要だったばかりではなく、シーンの雰囲気や場所の設定の伝達の

ためにも重要な機能を果たしていたのではないかと思われる例に突き当たるのが少なからずあった。そのため、舞台構造ばかりではなく、カーテンのようなある程度流動的な条件についても考察する必要があることを認識したからである。

シェイクスピアの劇団が上演した『美しき婦人たちへの警告』(A Warning for Fair Women)には、悲劇の上演における黒い掛け布の使用についての言及がある。‘The stage is hung with black: and I perceive / The Auditors prepared for Tragedy’ (Q1, A3r)。また、シェイクスピアの詩、「ルクリース凌辱」にも‘Black stage for tragedies’ (Q1, F3r) という表現がある。残念ながら、イギリス近代初期の悲劇に関する諸研究において、この習慣はほとんど意識されていない、というのが実情であるが、黒いカーテンのインパクトは強力であったはずである。

しかし、この習慣に関しては、不明な点が多い。まず、黒いカーテンが掛けられた場所について、舞台背後の壁全体、中央開口部、舞台の周囲、舞台の天井などの諸説があり、未だ定説はない。また、上演の間、ずっと黒いカーテンが掛かっていたのであろうか、それとも上演の一部だけだったのだろうか、という問題はこれまで誰も扱っていない。

そこで、黒いカーテンおよび単なる普通のカーテンへの言及のある劇作品を収集し、それらを分析した結果、黒いカーテンが掛けられたのも、単なる普通のカーテンがかけられたのも、中央開口部のみだったという説を採るのが妥当であるという結論を得た。

また、使用方法はフレキシブルであり、いくつかのパターンがあり得たことを示唆する台詞などを発見した。つまり、上演の間、終始、黒いカーテンが掛かっていることを必要とするよう書かれている劇もあれば、最初と最後の幕 (Act) だけ黒いカーテンが掛かっており、中間では違うカーテンを必要とするよう書かれている劇もあるし、中には、劇の後半、悲劇的結末にかけてのみ黒いカーテンを必要とするよう書かれている劇もある。このような結論に達した。

シェイクスピアの悲劇を論じる際、その上演の条件として、例えば、グローブ座では午後2時ころから、日光証明の下、一様に明るい舞台上で劇が上演された、というようなことばかりが強調され、舞台背後の黒いカーテンの存在はほとんど忘れられている。しかし、黒いカーテンの存在を意識しながら、例えば、『マクベス』を読めば、夢遊病のマクベス夫人が語る台詞 ‘Hell is murky’ (5.1.36) を当時の観客がどのような感覚で受容したか、これまでとは違う視覚的効果を想像することができるだろう。

こうした調査や考察の結果をまとめて、オリジナル・ステイジングの専門家たちのレビューを仰ぐことを目的として、‘“The stage is hung with black”: On the Use of Black Curtains

for Tragedies in the Early Modern Period’ を書いた。しかし、まだ、決定的な証拠を見つけたわけではなく、また、得たデータの解釈にあたって推論に頼らざるを得ないことも決して少なくはなかったこともあり、さらに多くの有効な例や情報を収集して、論考をより説得力のあるものとする必要があると認識している。また、当時の宗教、芸術、文化の研究から、こうした諸分野においてカーテンが果たした役割がきわめて大きかったことがわかった。それは演劇という現象自体にきわめて大きな影響を与えていたはずである。この問題もこれから考察すべき課題として残っている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. Mariko Ichikawa, “‘The stage is hung with black’: On the Use of Black Curtains for Tragedies in the Early Modern Period”, *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre*, 68 (2014), 153-88. 査読有

2. Mariko Ichikawa, ‘Shylock and the Use of Stage Doors’, *Theatre Notebook: A Journal of the History and Technique of the British Theatre*, 67 (2013), 126-40. 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

1. Mariko Ichikawa, ‘Enter to/at the door’, the 7th Blackfriars Conference, 24 October 2013, the American Shakespeare Center, Stanton, VA (USA).

〔図書〕(計 2 件)

1. Mariko Ichikawa, Cambridge University Press, *Moving Shakespeare Indoors*, ed. Gurr and Karim-Cooper, 2014, 79-94.

2. Mariko Ichikawa, Cambridge University Press, *The Shakespearean Stage Space*, 2013, xiii+221.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/51a93bdf77d975c55322253418f5bb2b.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市川 真理子 ( ICHIKAWA, Mariko )  
東北大学・大学院国際文化研究科・教授  
研究者番号：80142785

### (2) 研究分担者

(        )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

(        )

研究者番号：